訓幼字義

卷五

57X
51
7

心

漢語辭典 義部 圖書館

訓幼字義卷之五

心 心係

心とゝろの字通用すること二ゝろ
[illegible]ゝろ[illegible]ゝろ[illegible]ゝろ
[illegible]ゝろ[illegible]ゝろ[illegible]ゝろ
[illegible]ゝろ[illegible]ゝろ[illegible]ゝろ
[illegible]ゝろ[illegible]ゝろ[illegible]ゝろ
[illegible]ゝろ[illegible]ゝろ[illegible]ゝろ
[illegible]ゝろ[illegible]ゝろ[illegible]ゝろ
[illegible]ゝろ[illegible]ゝろ[illegible]ゝろ
[illegible]ゝろ[illegible]ゝろ[illegible]ゝろ

…ものみて…
…も主静のみをのみ…
●伊川程子云心一…
…注ニ寂而…注ニ感而…通天下之故是也又云喜…
…怒哀楽之未発…有指体而言者有…
…者也発而…皆中…謂之和感而…
…通者也…この二言…

…是先儒人心…
…すべきの…
…てい中庸…
…楽の…
中乃…
…動のみをいふ…
…思也元…
…之改非…
…この…

●古の経書よく人心を捉えて感動奮
易指著訣して人心をよく妙且動静
平如此とおよそ書はみな一精の事
を指うてい注あり程朱の具体の
てよく学用うるみちてあるよ
人心と如何とよみのてうとも驚
注あり如何とみのてうとも驚
の事おもいとかくよく著実
といわざるべからず

●古の経書よく人心を捉えて感動奮
易指著訣して人心をよく妙且動静
平如此とおよそ書はみな一精の事
を指うてい注あり程朱の具体の
てよく学用うるみちてあるよ
人心と如何とよみのてうとも驚
注あり如何とみのてうとも驚
の事おもいとかくよく著実
といわざるべからず

●古の経書よく人心を捉えて感動奮
易指著訣して人心をよく妙且動静
平如此とおよそ書はみな一精の事
を指うてい注あり程朱の具体の
てよく学用うるみちてあるよ
人心と如何とよみのてうとも驚
注あり如何とみのてうとも驚
の事おもいとかくよく著実
といわざるべからず

●古の経書よく人心を捉えて感動奮
易指著訣して人心をよく妙且動静
平如此とおよそ書はみな一精の事
を指うてい注あり程朱の具体の
てよく学用うるみちてあるよ
人心と如何とよみのてうとも驚
注あり如何とみのてうとも驚
の事おもいとかくよく著実
といわざるべからず

所用心有心哉擊
ひろくんを好ろよ
はよ及えそ女の
此て別しんをた
●ま〻のさまんを
世の上を知てこれ
のんをあをかし

事を正て緩言
をつも
ちよんの深
て思をよ
る心を宜
心とあり心の感
破とすても
の亦ま宮
をいて
雀叫はの事

なき諸教の未来をさとりて石火
のまえをあるがごとくしてふときみてまく
この六神無不動
ときみてうごかうまおうまおうまお

夫子七十の算よりおてもちゐて従心所
欲不踰矩しの句ハ人のまさ
するをきいやのうまいを句ハをもきゆへ
常こゝろしこゝろ句ハ句ハて七十の後ゟ
至りて心ゟ句ハかりてこゝろの
ゆくふやうに句ハてもおのつからそ
自のうへ句ハてかきてかり部分
の三月不違仁も同しやうに句ハん

をおもふの物ゟてこゝろ
するまゝにてこゝろよ理を具
平ゟ句ハ

●淫を酒かの悦ふの
の嗜歌好悪さ句ハくこゝろ
の志ぶさまて句ハくこゝろ
と又ものゝ月のてふあつてくく
清淳君のこゝろにて一点のくもりも
なく人欲これをおほふものゝ

りて或人この
伊川のいまそかりしころ
朱子のをはせし
此安定無出入此無
之心却是走作底物孟子所引夫子之言是
通衆人論耳又
つゐに失ひ
活底物
ころのをおひ
失

大抵学の成ら
をもちる人
唐悟る生
そもそもの
そもそもの
のまま
のまま
のまま

程朱ちこみの
て性ちの妖
ちれちるのこと
ちのいる
ちれるゆ
とゝろへぼて
ちゝしてゝ

●ちちのいるゆる
世ちの上み知てり

ちるのこゝろ
ちとゆちあ
知てこれを神す
人君皇世仁ちる
ね君へちゝ又日
せこと又ちちを
ちの自ゝして
ここちよいちる
ちとゝして

これを未然にふせぐ事をしるかるがゆえに前言に云く所以放真良心有未猶斧之於林也と又この章の首節まに人心也と又孔子の言をもて下に有私心而不知と云てこれをただしたまの言をもて私欲のこころをしるべしとも云ふは私欲の一字を畢生の工夫坑おし白起り

坑をこころするもこれをかえりみざるの為なりもし不仁不義のものもこれをしりてするを欲をこえてこれのそこなわざるをしりてこれをなさんとするを欲をもとむるをしりてこれをなさんとするを欲をもとむるをしりてこれをなさんとするを欲をもとむ

八二の外四
[illegible]列[illegible]
[illegible]よの学[illegible]集注[illegible]
[illegible]
[illegible]

●書程畢命の篇を雖收放心閑之
惟艱とつてこれをみやとそもそも
はをの名の扱まよちうこれを
畢命ハ古文尚書の内にて尚初か
この叩こをなぞれ法をの伝なる
てを失傳もこうかひありこれ
ハめとまり扱稿とこの書
●大学を曰ゆとそなりてまつ畢竟た

云く修身在正其心者身有所忿懥
則不得其正有所恐懼
有所好樂則不得其正有所憂患則不得其
とりてう章句に云ふ蓋是等皆心之
用而人所不能免者然一有之而不能
察別致事情勝而其用之所以
或不能不失其正矣この心の忿懥
恐懼等のごとくなるものあり

ところにおもむき各その法あるを
知るべくしていくたびかうまれてもまた
うの中をさまよいこのみこまやか
平らかにしてとうとく着て仏ごう
てをさめ一心にまよわず必ず
脱もこの宝のものこころよく教命
して不化とさとい境よ一切をつなぎおよく
等如乃至』
上

ところによくく物の種をこうる
一物を有生するときもうる
もの限をうけ
一法を学くとさとい物のをまさを
ろうろうろう
弟子のごく好集之類是合有底只
是不可留滞而不清化又日心不可
有一物喜怒亦無固執的真正
世過後須平了又日要有喜怒

要有但迫了則休不可常留在心とも
ふ況おもの用を云ふもの
一まの倫をそこに動ふまい当をそ云
ふ期をそこに倫をと云ひ以下五字
帰りて住事よんの仕ふをそこふ
一ごとに新始してそこもをもふ所の
人のおもをも百よりそふをき
おもふ当在てそこの長事をさふも
あとよこころのとふまるふ先ふもて待事を
事のまでふするをふ先ふもて待事を
てふこのこつのものを心不在と
云云をそこのそこに叱のてをきかまも
あるをふこもの事をふ移事の速
性書よ世お迫世内おもをあり
持てその相よの杜るて即
勿在ふり迎てまんなもふる
て即期待ふりはふ乃
勿報有おもふまでふまる五まで

ゑ畢竟 神の活ける應
無所住而生其心の上より扶ける處
實人心そのものよりあるよりあるを
○先人大學を
志倉又曰三月
律之則是無垂
平訓又
大學の仁礼を
弥しもすてゝよき惡事の
のみをそゝるゆへ
ゑまあれをも
これを民のよる
己れ分のよる
だゞ畢竟
すゝて則ち
ゑを若あの見よ

氏の活ける應
其心の上より扶ける處
あるよりあるを
て曰若使
不知肉味若以大学
人亦不免放心豈可
字を釋よりて
心をそゝる事を

のをそゝるゆへ
ゑんの字ない
正人心とありまよ
ゑすゝて
ゑの見よ
ゑいつり

ハこのこゝろをみるやうにせよて而
あるをこの四の七乃ん〳〵のをもら
きるおゝこれをもろ〳〵をもあ
もこのこゝろをもうあるとゝもし
その時をあるうとゝもして事すをお
事切をも着せねばこゝをするをう
有所の二字ををへしすう
ところあるとゝもをも悟をも悟
且てをの二とをこゝろをもう

ゝ而言をも
而をもうをの
ゝをみ
ゝをもう
ゝをもう
ゝをもう

なれるそ
惶且恨する事
りうと羽をう
らをとつて
もえんかうで
是故ありや
そこでみを遣
有所とは何事
ありや
又曾氏の開講
に

(將又大有所有所不為之君子)

ありや若夫
きてもしおい事
文社其所思仁也人皆
(有所不思)
(有所不為也)
ふみあるそと
ふ人皆有所
有所不
為之
君子
ありや
又大有所有所不為之君子
ありや若夫
きてもしおい事
文社其所思仁也人皆
(有所不思)
(有所不為也)
ふみあるそと
ふ人皆有所

あるもそもも朝菊有五けるをさす
まあるまるまるま

物をうるとき海をみ
もやこれをもちて
もち帰りて母にみせ
若きもの若きをさそ
まもりてあそぶ
つ人の物を盗むこと
をとこかんをこえて
もたらまして盗の
云却するやまして
あをそろへて一緒に
物としていろ〳〵
云まねあるの
ものこと
まてゝのこと
物をうるやまて
和名のれうり
ころの母も
感すること

ト

朱子曰事有當怒者但過了則
休不可常留在心頭子未嘗不怒但
不遷耳○按孔子何嘗不怒但
過而不遷耳○按孔子何嘗不怒但
過而不遷耳○按孔子何嘗不怒

すその字をみるに
○舞之珠四五舞不異舞と
みえたりけれこの
事ゆゑしの事のつきの
のてをおそて
いつゆつ人の引
これを意味のよ
又毋就度の
これをすこしかし

さる所を大切にすまつゆつまの事哀
毛伯もこれをかなしむ人人しるもの
私の切の事を
をてこれ
芸のそのあはを
の人ともあはれ
を法浄唐羽をそ
そてこれ
右紙不足此

三話即不可念淨世尊可年とある
惟亮位得ることを如人眼睛上
如一物不可住を所有能施亮
五眼云ふ所とそのごとき施あり一偈なりも日
下法大の施をしてのちものをさしてそのものをさしてそのものを
ふよ一物をとむるをとしてそのものをさしてそのものを
先陽の施かし異同あるも筆意

生活而仏世尊ニ奉施ノ功徳ヲ
以テ一切ノ衆生ノ為ニ
無上菩提ヲ願フ
自己一切ヲ清浄ニスルヲ
要旨トスル所ハ
ナリ
ス自楽天惟寛禄師ノ同ク

この抜文打ち順序すべし

○先儒心を論ずる多し唐宋
不明にて明鏡止水のごとく
この事一大学ごとく治者家業
これを知りて好
の抜ごとくして一言人の
ごとくこの指もみの
ごとくして
指をもて指を指すごとく

五ごとく自ずから
なすごとくおしの
ていうものにて唐宋名儒
後山水のごとく明
てこの言人ごとく
れなくこれを以
みの言葉のごとく
のごとし。唐
明治ないつ頃
ぬ

大島湾の
若閑松の
詩
笠石
五作の
囲碁の
書
あ
の

大至賦 國体別 有若干等 ……
……二百四十 部曲 賀婁氏 ……
又有大人統領 ……
……部曲 ……
……
賀婁氏別 有若干等 賀婁氏三等 ……
……
……

道経曰人心之
危微之惟明
君子而後能知之とあり此の危の
字あるとき此の
事あり此の一の注ありとも舜の
事あるとき危
字なくとも此の意あり
舜命禹の
書よ
命禹注今書有此語而云道経
蓋有道之経也と出前の注にて危
の大理評事楊
字なきをそなをかなをもつて楊注をそなを
字なきをそなをかなをもつて楊注をそなを
中庸章句の
序にも人心惟危道心惟微惟精惟一
字あるとき
字なきをそなをかなをもつて
人心道心とあるを
うそうそうそう

大抵天地の万物皆生ずるの
あるをもてあるを
利害のある人を
物ごとにこの二
あるを以て
人のこころの
理をもて
心をもて
とをもて
○人心道心のわ
わり第三の
道て人心
共あるを
多くをもて
人数の
あるもの
ものの二

朱子ものうち遺書云人心私欲也道心
正心也又云人心惟危人欲也道心惟微
天理也と人心道心をすてゝ私人欲を
はなれてみんなともに天理を明らめ
玩索をもつて工夫をなすべしらく人心云云
有訓道心云云矢具云有昌人心
非有二心也程子諸名分斯守言貴
はなれと伊尹訓太甲王氏云
会一をこのまれてまもつて程子の旨を

是をもつてこのをもて
聖をもつてをもつて朱子
乃ふみあつめ
書冊をあつめ
口天理人欲をもつて
もつて若無
の字を
一毫人欲し
をもつて礼記集

説をもつて朱子の
説をもつて
乃
討論
これ
これ
これ

靜天之性也感於物而動性之欲也
下之云々人化物也存滅天理而窮人欲
者也と陸象山もそを好てかゝる
曰

ここのところ礼記のそ

そ人そもかゝる要まることを
ふあるをとそをみてそかゝる物
礼記のおもて絵するを物
家人歌者也てこれをきゝてよ
かゝる人歌をよのをたゝあらあ
礼ものと對をおもひて歌をそもよ
手もの地々千色とあまをそ
重ねる物とまた
物てそ人歌とそ礼ものる
ものてくゝ歌と

みちりてそらに記のごとく先宗教と
その言を著して名つけそれを開
盡未盡心莫善於寡欲其為人也寡
寡欲雖有不存焉者寡矣孟子
養心不止於寡而存焉者寡矣又寡以至無
而理明寡之謂也
至於忠々則誠之明通之朱
子五程門弟子皆以寡欲
唐虞直而亮天工人其代之
とそれぞれ同じ事よのいうる
教えあるその寡欲
至るおもひて
りて又寡
あるまいる
をあるに教
おもそれ
ていあれ
うものみて
無き所と

○至賢の人仁をもて其の身をあらう
是心三月不違仁を以仁をもて其の
ものう仁をもて一ものう二てなんう
先儒程子の書冒をもちて心體
の敎旨生生性便是仁陽気発処
乃情也ものう仁をもの生理をもて
いうものう金是四時
仁をもて生生仁字是虚四字是
實如水をもて有比喻水字

是實心之手猶水之冷火之熱
又曰仁者是心如鏡相似仁便是面
鏡之明ものうをもてかくいうものう仁をもの修理をもて
人の生ある内よりいうをもて
ます鏡の死あれの内をほろぶを
なく私欲の蔽をもて私の性たるをもて
の性たるをなし是をこそもて
道をもて本となすの論あり畢竟

仁石仁をのみふ三代ニ而天下也共若
失天下也以不仁天下ニ而不保四海諸侯
[illegible]
[illegible]
[illegible]

先儒の説を引て古今通感
の注あるといへども畢竟粗音着字と
多くは字を訓をもて語主二也ゟ
ゟ字を訓ずる
◎夫帝の仁愛下もの如き阮謁の思を
ゟゟ生ずるゟゟゟゟゟゟゟゟ
ゟゟゟゟゟゟゟゟゟゟゟゟ
ゟゟゟゟゟゟゟゟゟゟゟゟ
ゟゟゟゟ

CL57X
No. 51
Vol. 7

此冊五十七丁

止